研究ノート

『不思議の国のアリス』はスペイン語にどう訳されているか（2）

髙　橋　節　子

¿Cómo se traduce al español *Alice's Adventures in Wonderland*? (2)

TAKAHASHI Setsuko

Ⅰ．使用したテキスト

前回[1]に引き続き、『不思議の国のアリス』のスペイン語訳を検討していく。検討した版は前回と同様、以下の11冊である[2]。出版社、国名、翻訳者、出版年の順に記す。

１．Anaya，スペイン，Lourdes Iñiquez Barrena，2011
２．Fondo de Cultura Económica（以下FCEと略），メキシコ，Luis Maristany，2013
３．Editorial Losada，アルゼンチン，Delia Pasini，2010
４．Editorial Legado，コスタリカ，José Argueta Reyes，2011，Kindle版
５．Torito Press，Martín Monreal，2011，Kindle版
６．Editorial Porrúa，メキシコ，Adolfo de Alba，2012，Kindle版
７．BN Publishing（以下BNと略），UK，2007

8．Jorge A Mestas Ediciones,（以下Mestasと略），スペイン，Ramón Buckley，2007
9．Longseller，アルゼンチン，Eduardo Stilman，2010
10. Valdemar，スペイン，Mauro Armiño，2006
11. Siglo 19，メキシコ，F. Alberto Alba，2012，kindle版

1　高橋（2014）を参照。また、原作については、Lewis Carroll, Martin Gardner, John Tenniel（1999）を参照する。

2　これ以外にも新たな書籍を２冊入手した。いずれも電子書籍である。
Creación, Ignacio Sanabria M.（訳）
Akal, Francisco Torres Oliver（訳）

２冊とも翻訳者の名前が明記されているので、前回扱ったことば遊びの部分に、斬新な訳があてられているかと期待しての購入だったが、あて外れだった。たとえば、９章のアリスとニセウミガメの会話の個所は、Creaciónでは次のようなスペイン語訳があてられている。

—(---)El maestro era una tortuga mayor a la que solíamos llamar Tortuga.
—¿Por qué le llamaban Tortuga, si no era una tortuga?’ —preguntó Alicia.
—Le llamábamos Tortuga porque nos daba clases —contestó la Falsa Tortuga de mal humor—.
「先生は年配のカメで私たちは“カメ”って呼んでいた」
「どうして“カメ”って呼んでいたの、カメじゃないのに」とアリスは聞きました。
「授業をしていたからカメって呼んでいたんだ」とニセウミガメは不機嫌に答えました。

このCreaciónの訳はまったく意味不明である。注をつけて説明しているがその説明も不十分である。英語での掛け言葉（tortoiseとtaught us）の説明が抜けているので、原作の面白味がまったく伝わっていない。

Akal社の訳もCreación社の訳とほぼ変わらない。
—La maestra era una vieja Tortuga y solíamos llamarla Tortuga de Tierra...
—¿Por qué la llamaban así, si no lo era? — Preguntó Alicia.
—La llamábamos así porque nos enseñaba —dijo la Falsa Tortuga con enfado—.
「先生は年とった“カメ”で、私たちは彼女を“陸ガメ”って呼んでた」
「どうしてそう呼んでいたの、そうじゃないのに」アリスは聞きました。
「だって私たちを教えていたからだよ」

Ⅱ．言葉遊び

９章に引き続き10章でもグリフォンとニセウミガメの言葉遊びが続く。ここでは、以下の原文に相当するスペイン語訳を検討する。すべてを引用すると長くなるので、問題となる箇所のみを抽出し、省略箇所は (…) で示す。

“Do you know why it’s called a whiting? (…)
“It does the boots and shoes,” the Gryphon replied very solemnly. (…)
“Why, what are your shoes done with?” said the Gryphon. “I mean, what makes them so shiny?” (…)
“They’re done with blacking, I believe.”
“Boots and shoes under the sea,” the Gryphon went on in a deep voice, “are done with whiting. Now you know.”
“And what are they made of?” Alice asked in a tone of great curiosity.
“Soles and eels, of course,” (…)

「どうして、タラ（whiting）って呼ばれているか知っているかい」(……)
「ブーツやくつを磨いているからだよ」グリフォンは重々しく言いました。(……)
「じゃ、君のくつは何で磨いているの」とグリフォンが言いました。「つまり、何でそんなにピカピカしているかってこと」
「靴墨（blacking）でやっているんだと思うけど」
「海の中で、ブーツやくつは」グリフォンは深い声でつづけました。「タラ（whiting）でやるんだよ。これでわかったろ。」
「じゃ、くつは何でできているの」アリスは興味津々で聞きました。
「カレイ（sole靴底）とウナギだよ、あたりまえだろ」

この部分のことば遊びは長く複雑なので、訳者の腕の見せ所となっている[3]。順次検討していく。

1. Anaya

—¿Sabes por qué se llama pescadilla?

—Pues, no se me ha ocurrido pensarlo —dijo Alicia—. ¿Por qué?

—Muy fácil—explicó el Grifo— : Las pescadillas son las pescadas chicas de las superficies del mar, todo lo contrario que los peces gordos que son los terratenientes de los grandes fondos submarinos ; por eso, cuando los pescadores las ven en sus redes, dicen Hoy tenemos pescada chiquitilla. Y de repetirlo una y otra vez, la palabra se ha ido acortando para adecuarse a su tamaño, y así todo el mundo la llama pescadilla.　　(pp.108－109)

「どうして、pescadilla（メルルーサの稚魚）っていうか知っているか？」

3　ちなみに、河合訳では、原文の意味よりもことば遊びを優先して以下のようになっている。

「大口魚（タラ）っていうのはね、でかい口して、」グリフォンはとても重々しく言いました。
「たらふく食うからさ」
「やたらめったら？」アリスはいぶかしそうに聞きました。
「よだれをたらたら、たらしてね。いや、まったくもう、ぐーたらたらなやつで」とグリフォン。「ひとをたらしこんだりもする。うそつきの仲間といっしょに」とグリフォンがすごく低い声でいいました。
「うそつきの仲間ってだあれ？」アリスはとても好奇心にかられてたずねました。
「大ぼらに、ぶりっこ子だよ、もちろん」　　(138-139頁)

柳瀬訳は次の通り。

「海んなかで靴をみがくってのは」と、グリフォンは重々しい声でいった。「身が苦なのだ。みがく身になりゃ不平たらたら。これでわかったろう」
「で、海のなかの靴って、どういうふうにできているの？」アリスは好奇心いっぱいの口調でいった。
「むろん、底は平べっ鯛し、飾りは鰈なもんよ」グリフォンは苛立たしげにいった。「そんなことも知らんとは、な鮭ない子だ」　　(144-145頁)

「そんなこと考えてみたこともなかったわ」アリスは言いました。
「どうして？」
「簡単さ」グリフォンは説明しました。「pescadilla っていうのは、pescada（メルルーサ）の子どもで、海水面にいるだろ。海底にいる地主の大物魚とは正反対だ。だから、網にかかったのを見て、漁師が、今日は「ちっちゃなメルルーサ（pescada chiquitilla）」がかかったぞ、って言う訳さ。それを何度も繰り返すうちに、だんだんことばも短くなってさ、今じゃ、みんながpescadilla って呼ぶようになったんだよ」

原文の意味からかなりかけ離れた訳文を当てている。言葉遊びを狙ったものだろうが、あまり面白いとは言えない。pescadillaはpescadaに縮小辞“-illo”がついた形なので、もともと「小さなpescada」という意味である。それをpescada chiquitillaが縮まってpescadillaになった、と説明されても意外性が感じられない。
「くつは何でできているのか」に対応する箇所はない。

２．Fondo de Cultura Económica（以下、FCEと略す）

—¿Sabes por qué las llaman pescadillas?
—Nunca se me ha ocurrido pensarlo. —dijo Alicia. —¿Por qué?
—El nombre tiene que ver con escasez y con antigüedad —replicó el Grifo en tono muy solemne. (…)
—¿Tú sabes que las pescadillas son muy delgadas? (…)
—Pues en eso se diferencian del llamado pez gordo, que es una variedad muy acaudalada.
—La distinción no es ninguna maravilla. —se atrevió a observar Alicia.
—No —dijo el Grifo—, es más bien un motivo de continuas pesadillas económicas. Y así, no han podido sobrepasar la primera fase de crecimiento. El problema, por lo demás, es tan antiguo como la lengua,

de modo que su nombre viene también marcado como peç-cedilla.

（pp.107-108）

「どうしてpescadillaって呼ばれているか、知ってるか？」

「考えてみたこともなかったわ。どうして」とアリスは言いました。

「pescadilla（メルルーサの稚魚）っていう名前は、乏しさ（escasez）とか昔（antigüedad）とかに関係しているのさ」グリフォンは重々しい調子で答えました。（……）

「知っての通り、pescadillaはすごくやせているだろう。そこが、金持ちのお偉いさんとの違いさ」

「その違いは別に驚くことじゃないわ」アリスは思い切って言いました。

「ああ」グリフォンは答えました。「それはむしろ経済的悪夢（pesadilla）が続いたからさ。だから、成長期の第一段階を超えられないんだ。それに、その問題はすごく古いんだよ、ことばと同じくらいに。だから、名前にもセディーユが付いているのさ」

これも原文の意味を犠牲にして言葉遊びに重点をおいたもので、相当に手の込んだスペイン語訳である。pescadilla（メルルーサの稚魚）→pez delgado（やせた魚）→pez gordo（ふとった魚、大物）→pesadillas（悪夢）→peç-cedilla（セディーユが付いたpez）へと連想が進んでいく。pescadilla、pesadilla、peç-cedillaの三つは韻を踏んでいるし、語頭音も似ている。“ç”の下についている記号は、もともと中性スペイン語で用いられた記号zedilla（「小さなZ」の意味）に由来する。“c”の文字には、〔k〕と〔ts〕の発音があったので、〔ts〕の方にcedillaをつけて区別したのである[4]。ことばと同じように古いというのは、これが中世スペイン語に由来することを意味している。

4　上田博人『スペイン語文法ハンドブック』30頁

3．Losada

—¿Sabes por qué se llama pescadilla? (…)

—Hace las botas y los zapatos (…)

Alicia estaba completamente atónita. …*Hace las botas y los zapatos.*… respondió, dubitativa.

—Y bien, ¿con qué te haces tus zapatos? (…) Quiero decir, qué los hace brillar tanto? (…)

—Están lustrados con betún, supongo.

—Las botas y los zapatos bajo el mar (…) se lustran con atún y se blanquean con pescadilla. Ahora lo sabes.

—¿y de qué están hechos?—preguntó Alicia con mucha curiosidad.

—De lenguados y anguilas, claro. (p.144)

「どうしてpescadillaっていうか知っているかい」(……)

「それは、ブーツやくつをつくるからさ」

アリスは呆れかえってしまいました。「ブーツやくつをつくるの」疑わしそうに言いました。

「じゃ、きみは自分のくつを何でつくるんだい。つまり、何でそんなにピカピカにしているのかってこと」

「靴墨（betún）でピカピカになっているんだと思うけど」

「海底では、ブーツやくつはね、(……) atún（マグロ）でみがいて、pescadillaで白くするんだよ。これで分かったろう」

「じゃ、くつは何でできているの」とアリスは興味津々で聞きました。

「ヒラメとウナギだよ、もちろん」

Losadaでは、atún（マグロ）が登場する。これはもちろんbetún（靴墨）と韻を踏むためである。また、脚注をつけてそこで英語のかけことばの説明をする、という方法をとっている。

4．Legado

—¿A que no sabes por qué las pescadillas son blancas? (…)

—Pues porque sirven para darle brillo a los zapatos y las botas, por eso, por lo blancas que son.

—(…) Cómo se limpian tus zapatos? Vamos, cómo se les saca brillo? (…)

—Con betún negro, creo.

—Pues bajo el mar, a los zapatos se les da blanco de pescadilla (…)

「どうしてpescadillasはそんなに白いか知っているかい？」

「それはさ、くつやブーツをピカピカにするためだよ。だって、白いんだからね。」

(……)「きみのくつはどうやってきれいにするんだい。つまり、どうやってピカピカにするのかってこと」

「靴墨（betún）でだと思うけど」

「海の底ではさ、くつやブーツはpescadillaで白くするんだよ。もう分かったろう」

英語の原文をそのまま訳しているだけなので、スペイン語としてのことば遊びの要素は抜け落ちている。

5．Torito

“¿Sabés[5] por qué se llama atún?”

“Nunca me paré a pensarlo”, dijo Alicia. “¿Por qué?

“Lustra botas y zapatos.” contestó el Grifo muy solemne. (…)

“Bueno, ¿con qué lustras tus zapatos? “ dijo el Grifo. “Digo, ¿qué los hace tan brillantes?” (…)

“Los lustran con betún, creo. “ (…)

5　sabesの誤りだと思われる。

“En el mar, las botas y zapatos, (…) se lustran con atún. Ahora lo sabes.”

“¿Y de qué están hechos?” preguntó Alicia con tono de gran curiosidad.

“Cazuelas, por supuesto”, respondió el grifo con cierta impaciencia.

「どうしてatún（マグロ）って呼ばれているか知っているかい」

「考えてみたこともなかったわ」とアリスは言いました。「どうして？」

「ブーツとくつをみがくからさ」と、グリフォンは重々しく答えました。(……)

「じゃ、君の靴は何でみがくんだい」とグリフォンが言いました。「つまり、何でそんなにピカピカにしているのか、ってこと」

「靴墨（betún）でみがくと思うけど」(……)

「海の中では、ブーツと靴は、マグロ（atún）で磨くんだよ。今度は分かったろう。」

「で、何でできているの」アリスは好奇心いっぱいで聞きました。

「シチュー鍋（cazuelas）に決まっているじゃないか」グリフォンはイライラして答えました。

先のLosadoと同様、ここでは“pescadilla”ではなく、“atún（マグロ）”が登場する。これはbetún（靴墨）と韻を踏むためである。

グリフォンは「ブーツや靴はシチュー鍋(cazuelas)でできている」と言っている。しかも「決まっているじゃないか」とも。cazuelaから容易に連想される単語にsuela（靴底）がある。cazuelaとsuelaは“uela”で韻を踏んでいる。さらに、“z”を/s/で発音する地域であれば、“suela”全体が共通している。

6．Porrúa

―¿Sabes por qué se llaman merluzas? (…)

—Porque limpian las botas y el calzado. (…)

—¡Limpian las botas y el calzado!—repitió, sorprendida.

—Pues , con qué se hace el calzado? — dijo el Grifo. —Quiero decir, ¿con qué se les da brillo? (…)

—Creo que se les da brillo con grasa.

—Las botas y los zapatos, en el fondo del mar (…) se hacen brillar con grasa. Ahora ya lo sabes.

（下線部は著者）

「どうしてメルルーサっていうか知っているか」（……）

「ブールやくつを磨くからさ」

「ブーツやくつを磨く、ですって」アリスはびっくりして繰り返しました。

「じゃ、はきものは何でできているんだい」グリフォンが言いました。

「つまり、なんでピカピカにするのか、ってこと」

「靴磨きでだと思うけど」

「ブーツやくつは、海の底ではさ、靴磨きで磨くんだよ。今度は分かったろう。」

下線部のgrasaはmerluzaのミスであろう。地上では靴磨きで磨き、海底ではメルルーサで磨く、と言いたかったのであろう。これもLosadaと同様に、原文をそのまま訳している。しかも重要な箇所でのミスであり、Losadaと違って脚注もついていない。

7．BN publishing

—¿Sabes por qué se llaman merluzas? (…)

—Por lo que se refiere a las botas y a los zapatos. —Contestó muy solemnemente el Grifo. (…)

—De qué están hechos tus zapatos? Quiero decir, ¿por qué se ven brillantes? (…)

—Se me ocurre que están hechos de cuero negro.

—Los zapatos que se usan en el fondo del mar se limpian con luz, la luz de la mer-luz-a, ¿comprendes?

—¿Y de qué los hacen? —preguntó Alicia con gran curiosidad.

—Con suelas de lenguado y cordones de anguila. (p.147)

「どうしてメルルーサ（merluza）って呼ぶか知っているか？」

「ブーツやくつに関係しているからさ」グリフォは重々しく答えました。(……)

「君の靴は何でできてる？つまり、どうしてツヤツヤしているのか、ってこと」(……)

「黒い皮でできてると思うけど」

「海の底で使うクツはね、luz(光)で磨くのさ、つまり、mer-luz-aのluzでさ。分かった？」

「じゃ、くつは何でできてるの？」アリスは興味津々で聞きました。

「舌ビラメの靴底とウナギの靴ひもでだよ」

ここでは、pescadilla（メルルーサの稚魚）ではなく、merluza（メルルーサ）になっている。mer-luz-aのluz（光）で磨くというダジャレが効いている。

8．Mestas

—¿Podrías decirme, por ejemplo, por qué las pescadillas tienen la carne tan blanca? (…)

—Porque se utilizan para sacar brillo a los zapatos. (…)

—Vamos a ver, ¿cómo crees tú que se lustran los zapatos? (…)

—Con betún, supongo yo—

—¡Querrás decir con atún!—le corrigió el Grifón—. Pero eso, cuando los zapatos son negros...Si son blancos, como suele ocurrir en el fondo del mar, entonces se blanquean con pescadilla. (pp.109-110)

「例えば、どうして、pescadillaはそんなに白い体をしているか知っているかい？」(…)

「それは靴を磨くためだよ」(…)

「じゃ、君はどうやって靴を磨くと思うんだい？」

「靴墨（betún）でだと思うけど」

「今、atún（マグロ）って言いたかったんだよね」グリフォンはアリスの間違いを訂正しました。

「でも、それは、靴が黒い時だよ。靴が白かったら、海の底ではたいてい白いんだから、pescadillaで白くするんだよ」

betún（靴墨）とatún（マグロ）で韻を踏んでいる。この点はToritoと同じであるが、Toritoのようなことば遊びの面白さはない[6]。

9．Longseller

—¿Sabes por qué se llama merluzas? (…)

—Tiene que ver con botas y zapatos. (…)

—¡¿Con botas y zapatos?! (…)

—¡Claro! ¿Con qué se hacen tus zapatos? —dijo el Grifo—. Quiero decir, ¿qué es lo que los hace tan brillantes? (…)

—El betún, creo.

6　この後に続けて次の文がある。betúnとatúnだけでは面白みがないと考えたのかもしれない。
—¿Y Cómo se ajustan a los pies, si siempre están mojados?—quiso saber Alicia.
—Pues con lenguetas de lenguados! —le contestó el Grifón con impaciencia—¡Y si pierde la forma, lo que suele ocurri a menudo con tanta humedad, pues se arquena con unas ballenas! (p.110)
「靴をどうやって足にぴったりさせるの？いつも濡れているのに」とアリスは知りたがりました。
「もちろん舌ビラメの舌靴でだよ」フリフォンは重々しい声で答えました。
「で、もし形が崩れたら、湿気が多いからよくあるんだけど、くじらのひげでアーチ形にするのさ」

—Pues a las botas y los zapatos del mar (…) los vuelve brillantes la merluza. Ahora lo sabes. (p.115)

「どうして、メルルーサって呼ばれるか知っている？」(……)

「ブーツや靴に関係があるのさ」(……)

「ブーツや靴ですって？！」(……)

「もちろん。君の靴は何でつくられているの？」とグリフォンは言いました。

「つまり、どうしてそんなにピカピカなのか、ってことだよ」(……)

「靴墨だと思うけど」

「海の中ではさ、ブーツや靴はさ、(……) メルルーサがピカピカにするんだよ。今、わかったろう」

10のValdemarも11のSiglo19も、内容はLegadoとほぼ同じである。海の底では、靴墨ではなく“pescadillaの白”で靴を磨く、と言っている。原文をそのままスペイン語に移し替えただけである。

ここまで、11の版を検討してきた。ほとんど原文の直訳でスペイン語としてことば遊びのおもしろさがまったくないものは、Losada, Porrúa, Longseller, Legado, Valdemar, Siglo 19の６版で、全体の半分以上を占める。他の翻訳は、原作の精神を活かしてスペイン語でもかけことばを創出しようと努力している。特に工夫が見られるのは、FCE, Torito, BNの３つの翻訳である。他の二つ（Anaya, Mestas）は残念ながらあまり面白いとは言えない。

Ⅲ．海の学校で習う教科について

ニセウミガメとグリフォンの話には、彼らが海の学校で習った教科名がたくさん登場する。陸の学校とどう違うのか検討してみよう。

原文において、海の学校ではReadingの代わりに“Reeling”（リールを巻く）を教え、Writingの代わりに“Writhing”（身をよじる）を教えている。スペイン語版の海の学校ではどんな教科を教えているのだろうか[7]。

陸の学校	Leer（読む）	Escribir（書く）
1．Anaya	*Letrear（字習い）	*Balbucir（もぐもぐ言う）
3．Losada	Oler（においを嗅ぐ）	Escupir（つばを吐く）
4．Legado	Beber（飲む）	Escupir
5．Torito	Lamer（なめる）	Escupir
6．Porrua	Lucir（見せびらかす）	Agriar（いら立たせる）
7．BN	Dar vueltas（回転する）	Hacer contorsiones（曲芸をする）
8．Mestas	Beber	Escupir
9．Valdemar	Lectura（読み方）	Escritura（書き方）
10. Longseller	Tambaleado（よろめいて）	Retorcido（ねじって）
11. Siglo 19	Caer（落ちる、転ぶ）	Existir（生きる）

Leer（読む）とEscribir（書く）を意識して、er動詞、ir動詞を選んだものが多い。特に、Beber（飲む）とEscupir（唾を吐く）が好まれている。escupir（つばを吐く）はescribirと非常によく似ている。BNのhacer contorsiones, LongsellerのRetorcidoは英語の“Writhing”（身をよじる）を意識したものであろう。Valdemarの海の学校は陸の学校と何ら変わらないので面白味がない。

FCEは特別に説明が必要なので、表には載せていない。該当箇所を以下に引用する。

—Yo no pude matricularme—suspiró la Falsa Tortuga. —Solo seguía los cursos ordinarios.

—¿Y qué veían en ésos? —preguntó Alicia.

7　スペイン語の教科は版によって、大文字の場合と小文字の場合があるが、ここでは、すべて大文字に統一する。

—Veíamos a la legua, con o sin taxis, y gramática parda, y luego, las distintas ramas de la aritmétrica: ambición, distracción, multicomplicación y diversión. (p.99)

「私は履修できなかったの」ニセウミガメはため息をついた。「ただ普通のコースを取ったの」

「で、そこで何が分かった（見えた）の」とアリスは聞いた。

「私たちは一里先でもはっきり見えたわよ。タクシーがあろうがなかろうがね。それに教養のない文法も。それから、算数のいろいろな分野、例えば、野心、娯楽、複合合併症、楽しみなんか。（……）

“legua（昔の距離の単位）”は“lengua”（言語）を連想させ、sin taxis（タクシーなし）は“sintaxis”（統語論）を想起させる。gramática pardaは「教養のないものが機転や悪知恵を働かせる」という慣用表現である。どうやらFCEのニセウミガメが習ったのは、陸の学校においてlengua（言語），sintaxis（統語論），gramática（文法）に相当する教科のようである。

代数の分野として習った教科は、各版ともにかなり共通している。アリスが陸の学校で習ったのは、左からそれぞれ、足し算（adición）、引き算（sustracción）、掛け算（multiplicación）、割り算（división）[8]である。

陸の学校	Adición	Sustracción	Multiplicación	División
1．Anaya	Ambición	Distracción	Mutilación	Aversión
2．FCE	Ambición	Distracción	Multicomplicación	Diversión
3．Losada	Ambición	Distracción	Repulsificación	Diversión
4．Legado	Fumar	Reptar	Feificar	Dimisión
5．Torito	Sudar	Reptar	Horrificar	Dimitir
6．Porrua	Ambición	Distracción	Afeamiento	Irrisión

8　原文における英語の教科名は以下の通り：Ambition, Distraction, Uglification, Derision.

7．BN	Ambición	Distracción	Afeamiento	Irrisión
8．Mestas	Fumar	Reptar	Mutilar	Dimitir
9．Valdemar	Ambición	Distracción	Feificación	Irrisión
10．Longseller	Ambición	Distracción	Feificación	Irrisión
11．Siglo 19	Ambición	Distracción	Horrorización	Suplicación

海の学校において陸の学校のadición（足し算）に相当するのはambición（野心）であり、sumar（足す）に相当するのはfumar（煙草をすう）やsudar（汗をかく）である。sustracción（引き算）には、distracción（気晴らし）が、restar（引く）には、reptar（這う）が相当する。陸の学校のdivisión（割り算）は、海の学校では、aversión（反感）だったり、diversión（楽しみ）だったり、dimisión（辞職）、irrisión（お笑い草）、suplicación（懇願）だったりする。いずれも、音の連なりが似ていて、韻を踏んでいる。

Mestasの教科Dimitir（辞める）の説明を見てみよう。「“dimitir”ってどういうこと？」と聞くアリスにグリフォンは次のように質問する。

—¿Qué ocurre cuando llegas a la escuela por primera vez? (…)
—Pues que … ¡te admiten en la escuela! —dijo Alicia
—Pues dimitir es lo contrario —dijo el Grifón—. ¡Es cuando te echan! Hasta el más tonto sabe eso. (pp.101-102)
「学校に初めて来る時、何が起こる？」(……)
「ええと、入学を許可される（admitir)」とアリスは言いました。
「dimitirはその反対さ」グリフォンは言いました。「つまり追い出される時にやることさ。どんなばかでも知っていることだ」

原文で、掛け算（multiplicacion）に対応する海の学校の教科は“*uglification”である。アリスがそんなことばは聞いたことがないというと、グリフォンが、“beautify”を知っているなら当然“uglify”も知って

いるはずだ、と言ってアリスを馬鹿にするのである。その部分のスペイン語訳を検討してみよう。

*Feificar, *Horrificar, *Afeamiento, *Feificación, *Horrorización, *Repulsificación, すべて存在しないことばである。*Feificarは「feo（醜い）」に「-ificar」という動詞化語尾がついた造語である。*Feificaciónはその名詞形。*Afeamientoはafear（feoにする）という動詞から派生させた名詞である。*Horrorizarはhorror（恐怖、嫌悪）に「-izar」という動詞化語尾をつけたものである。

一方、Mestas版のMutilar（〈手足を〉切断する）はmultiplicar（〈数を〉かける、増やす）に音を似せたものである。Anayaの*Multilaciónはmutilación（手足の切断）とmultiplicación（掛け算）を合成したような語である。

FCEの*Multicomplilcación（多合併症）は、multi-plicaciónの後半をcomplicación（複雑、合併症）で置き換えた合成語である。FCEにおけるアリスとグリフォンのやり取りを引用する。

—Nunca oí hablar de multicomplicación—se atrevió a decir Alicia—. ¿Qué es eso?

El Grifo levantó las patas en señal de sorpresa.

—¡Cómo que nunca oíste hablar de multicomplicación! —exclamó—. Sabrás lo que es complicación, supongo...

—Sí—contestó con inseguridad Alicia.

—Pues si lo sabes, y no sabes también que las complicaciones nunca llegan solas—sentenció el Grifo—, eres bien tonta. (pp.101-102)

「私は、multicomplicaciónなんて聞いたこともないけど」思い切ってアリスは言いました。「それって何」

グリフォンは驚いたというように、足をあげました。

「なんと、multicomplicaciónを聞いたことがないだって」と叫びました。

「complicación（困難）なら知っているよね」
「ええ」アリスは自信なさそうに答えました。
「それを知っていて、合併症（complicaciónes）が決して単独ではやってこないことを知らないとしたら、おまえは馬鹿だ」グリフォンはきっぱりと言いました。

complicación(es)には二重の意味（困難、合併症）がある。アリスはcomplicaciónを「困難」の意味でとらえて､「知っている」と答えたのだが、グリフォンはそれを「合併症」の意味に巧妙にすり替えて、アリスを馬鹿にするのである。原作の『アリス』にも意味の二重性を利用した応答が随所にみられる。それを踏襲したFCEの訳は見事だと言える。

海の学校でニセウミガメが学んだその他の科目[9]には次のようなものがある。

陸の学校	Historia歴史	Geografía地理	Dibujo図画
1．Anaya	Difteria	Martiriografía	Pintorreo
2．FCE	Escoria	Mareografía	Bellas tardes, Tapujo
3．Losada	Escoria	Mareografía	Embrujo
4．Legado	Histeria	Mareografía	Dibujo
5．Torito	Histeria	Mareografía	Pavura
6．Porrua	Misterio	Marografía	Balbuceo
7．BN	Misterio		Pronunciación
8．Mestas	Histeria	Mareografía	Orujo
9．Valdemar	Histeria	Mareografía	Bibujo

9　以下、原作を引用する。
Mystery, ancient and modern, with Seaography: then Drawling---the Drawling-master was an old conger-eel, that used to come once a week: he taught us Drawling, Streching, and Fainting in Coils.（p.98）
古代ミステリーと現代ミステリー、海理学、それから、間延びした話し方。先生は年寄りのアナゴ先生で、一週間に１回やってきた。私たちに、間延びした話し方、ストレッチ、ぐるぐる巻き失神、を教えてくれたよ。

10. Longseller	Misterio	Mareografía	Arrastrado
11. Siglo 19	Mistoria	Mareografía	Debujo
12. Creación	Misterio	Mareografía	Pronunciación lenta
13. Akal	Ecoria	Marografía	Difuso

ニセウミガメが習ったのは、historiaではなく、difteria（ジフテリア）、escoria（石炭クズ）、histeria（ヒステリー）、misterio（ミステリー）、等である。Siglo19の*mistoriaは存在しない言葉であり、historiaとmisterioを合成した造語である。謎史とでも訳せようか。

陸の学校では「geografía（地理）」を勉強するが、海の学校では当然「海の地理」を勉強する。mar（海）とgeografíaの合成語で、*mareografía、あるいは、*marografíaという単語がつくられる。

陸の学校では「図画（dibujo）」を学ぶが、海の学校でdibujoに相当する学科はいろいろである。まず、陸の学校と同じDibujo、一字違いの *Debujo、*Bibujo。さらにOrujo（絞りかす）やEmbrujo（魔術）。これらはdibujoと韻を踏んでいる。*Pintorreoは*pintorrearという動詞の名詞形である。pintor（画家）に-earという動詞形成語尾をつけて作られた人工語である。Pavura（恐怖）はpintura（絵画）と韻を踏んでいる。Pronunciación（発音）、Pronunciación lenta（ゆっくりとした発音）、Balbuceo（もぐもぐ言う）等は、英語のDrawling（間延びした発音）をスペイン語に訳したものである。LongsellerのArrastrado（引っ張られて）は英語のdrawing（スケッチ、引く）をそのままスペイン語に訳したものである。また、「海絵」の先生方はサメ（Anaya）であったり、カニ（Losada, Mestas, Longseller, siglo19）であったり、ウナギ（Torito, Porrúa）であったりする。

FCEの“bellas tardes”は別途説明が必要である。

...el profesor de bellas tardes era un viejo que solía venir después de

comer una vez por semana: él nos enseñaba toda clase de tapujos, y también a escupir y a pitar al estilo eolio.（p.102）
「美午後」の先生は年寄りで、週に一度、昼食後にやってきたものさ。僕たちに、「隠しだて」のいろいろな授業を教えてくれた。そのほかに、「唾吐き」や「風笛」なんかも。

午後の挨拶は、Buenas tardes.（良い午後）なのだが、絵の科目は、Bellas artes（美術）ならぬBellas tardes（美しい午後）である。なぜなら、Bellas tardesの先生は年寄りで午後にやってくるからである。教える科目は、Tapujo（隠しだて）で、これはdibujo（図画）と韻を踏んでいる。

原作では、海の学校のアナゴ先生は、Drawlingの授業で、Sketchingの代わりにStreching（ストレッチ）を、Oil Paintingの代わりにFainting in Coils（ぐるぐる巻き失神）などを教えている。では、スペイン語版の海の学校では、どんな科目を教えているのだろうか？

1．Anaya	Bostezo	Aguanela con calores
2．FCE	Escupir	Pitar al estilo eolio.
3．Losado	Ensueno	Tintura al solio
4．Legado		Tintura al boleo
5．Torito	Desbrujar	Pinchar al Petróleo
6．Porrua	Estirarnos	Desvanecernos en epirales
7．BN	Desmayo	Volteretas
8．Mestas	Estatura	Tintura
9．Valdemar	*Reboce	Tintura al Poleo
10. Longseller	Estirado	Desmayado en espirales
11. Siglo 19	Bostezar	Pintura al olio
12. Creación	Estiramiento	Desmayarse a boleo
13. Akal	Hacer Boletos	Pringar al Cóleo

教えている科目は様々である。「スケッチ（bosquejo, esbozo）」を教えている海の学校は一つもない。その代わり、Bostezo（あくび）やBostezar（あくびをすること）を教えている。Estirado, Estiramiento（ひきのばし）は英語のStrechingの訳そのままである。Estirarnosも同じ系統である。Escupir（唾を吐く）はescribir, describirからの連想であろう。*Desbrujarはbrujo（魔法使い）と dibujar（絵を描く）を足して二で割ったよう創造語である。Estatura（身長）はestirar（伸ばす）とpintura（絵）を合成したような語である。*Reboceは存在しない語であるが、rebozar（顔を隠す）を連想させる。

油絵（pintura al óleo）を教えている学校はないが、Pintura al olio（油絵）を教えている学校はひとつある。他の学校では、その代わりに、Tintura（染色）、Tintura al boleo（投げ染色）、Tintura al Poleo（ハッカ染め）などを教えている。また、Pinchar al petróleo（石油突き）、Pringar al Coleo（シソ染め汚し）だったりする。*Aguanelaはacuarela（水彩画）の前半をagua（水）で置き換えたものである。“acuarela con colores”（色つき水彩画）ならぬ、“con calores” である。いろいろな種類の暑さで「水絵」をどうやって描くのか想像もつかない。

Desmayo（失神）、Desmayado en espirales、Volteretar（宙返り）、Desmayarse a boleo, Desvanecerse en espiralesは原作のFainting in Coils（ぐるぐる巻き失神）をスペイン語に訳したものである。

その他、海の学校では、ラテン語、ギリシア語に相当する科目が教えられている。原作によると、陸の学校のLatinとGreekに相当する科目はそれぞれ、Laughing（笑い）とGrief（嘆き）である。スペイン語の海の学校の科目名はどうなっているだろうか。

1．Anaya	Patín	Briego
2．FCE	Lata sin fin	Rudimentos de riego

3．Losado	Patín	Riego
4．Legado	Patín	Riego
5．Torito	Patín	Riego
6．Porrua	Risa	Pena
7．BN	Risa	Pena
8．Mestas	Batín	Friego
9．Valdemar	Risa	Llanto
10．Longseller	Risa	Llanto
11．Siglo 19	Risa	Llanto

Risa（笑い）とLlanto（嘆き）としている版が多いが、これは英語の直訳である。Patín（スケート靴）はlatín（ラテン語）と最初の一字が違うだけである。Riego（水撒き）はgriego（ギリシア語）から最初の“g”を取ったものである。*Briegoと*Friegoは存在しない名詞であるが、griegoと韻を踏んでいて、bregar（あくせく働く）とfregar（拭く）を連想させる。FCEのLata sin finは“終わりのない面倒事”という意味であるが、活用の多いラテン文法は、まさしく“終わりのない厄介事”という感じである。そして、中間を抜いて語句の最初と最後を組み合わせるとLat（a sin f）in、ラテン語latínになる。Rudimentos de riego（水まきの基礎）はもちろん“rudimentos del griego”（ギリシア語の基礎）をもじったものである。海の中でriego（灌漑、散水）の基礎を学ぶというバカバカしさが笑いを誘う。

以上で、９章、10章におけるアリス、ニセウミガメ、グリフォンのことば遊びの検討を終了する。次回はそれ以外のことば遊びと替え歌の部分を取り上げることにする。

〈引用文献〉

原作

- Lewis Carroll, Martin Gardner, John Tenniel, *The Annotated Alice, The Definitive Edition*, W.W. Norton & Company, 1999.

スペイン語訳（訳者名を載せる。記載がない場合には、出版社のみ）

- Lourdes iñiquez Barrena（訳）, Anaya, 2011（*Alicia en el País de las Maravillas*）
- Luis Maristany（訳）, Fondo de Cultura Económica, 2013（*Alicia en el País de las Maravillas*）
- Delia Pasini（訳）, Editorial Losada, 2010（*Alicia en el País de las Maravillas*）
- José Argueta Reyes（訳）, Editorial Legado, 2011, Kindle版（*Alicia en el País de las Maravillas*）
- Martín Monreal（訳）, Torito Press, 2011, Kindle版（*Alicia en el País de las Maravillas*）
- Adolfo de Alba（訳）, Editorial Porrúa, 2012, Kindle版（*Alicia en el País de las Maravillas, Al otro lado del espejo*）
- BN Publishing（訳）, 2007（*Alicia en el País de las Maravillas*）
- Ramón Buckley（訳）, Jorge a Mestas Ediciones, 2007（*Alicia en el País de las Maravillas*）
- Eduardo Stilman（訳）, Longseller, 2010（*Aventuras de Alicia en el País de las Maravillas, Através del espejo y qué encontró Alicia allí*）
- Mauro Armiño, Valdemar（訳）, 2006（*Aventuras de Alicia en el País de las Maravillas, Al otro lado del espejo*）
- F. Alberto Alba（訳）, Siglo 19, 2012, kindle版（*Alicia en el País de las Maravillas*）
- Ignacio Sanabría M.（訳）, Creación, 2014, kindle版（*Alicia en el País de las Maravillas*）
- Francisco Torres Oliver（訳）, Akal、kindle版（*Alicia en el País de las Maravillas*）

日本語訳

- 河合祥一郎（訳）『不思議の国のアリス』、角川文庫、平成22年
- 北村太郎（訳）『不思議の国のアリス』、集英社文庫、1995年
- 柳瀬尚紀（訳）『不思議の国のアリス』、ちくま文庫、1989年

その他

- 髙橋節子「『不思議の国のアリス』はスペイン語にどう訳されているか(1)」、『白鷗大学論集』第29巻、第１・２合併号、309-332頁、2014年

（本学経営学部教授）